

わたしはきみをまもらないわたしはきみをしあわせにしない

若松 由希久

四月はじめの土曜日だった。降り続いた雨は明け方になってようやく止み、雲間から顔を出した太陽が濡れた下界をきらきらと輝かせていた。一日の始まりとしては、悪くないと思えた。

生が善であり死が悪であるという昔ながらの通念を受け容れるのなら、わたしはその日、少なくとも午前中だけは外へ出るべきでなかったのだろう。でもあいにく窓から見える街並みは明るく美しく、わたしを外へ外へと誘っているみたいだった。それに冷蔵庫を開ければ、以前男のために買い置きして今は誰も飲む者のないビールの六缶パックが冷えた存在感を増すばかりで食料と呼べそうなものはほかになく、早急に買い出しへ行く必要もあつたのだ。

そういうわけで午前十時ちょうどに部屋を出たわたしはその七分後、車にはねられて死ぬことになった。交差点で信号待ちをしているところへ、突然ノーブレーキで乗用車が突っ込んできたからだ。夜勤明けで帰宅途中だったそのドライバーは花粉症のために強い薬を飲んでおり、交差点に入る直前になって瞬間的に眠り込んでしまったのだ。路面に後頭部を強打し即死した直後、わたしにはそういうことがすべてわかった。

目と耳と鼻と口、頭部にあるすべての穴から血を噴き横たわる自分の無惨な姿をわたしは集まってきた野次馬とともに見下ろしていた。いつか見た海外の写真集に載っていた死体写真がちょうどこんなふうだったな、なんて思いながら。しばらくすると救急車がやってきて、その場で蘇生処置がおこなわれたけれどももちろん手遅れで、何の意味もなかった。少し離れたところでは、事故を起こしたドライバーがぼんやりと突っ立って、他人事のようにこちらを眺めていた。

わたしの身体が救急車に載せられどこかへ運び去られたあとも、わたしはその交差点にとどまったままだった。警察の人たちが来て、ドライバーと話をしたり、地面に印をつけたら、交通整理をしたりと、それぞれの仕事を手際よくこなしていた。そういった人々も日が傾く頃にはみんな去ってしまい、あとにはわたしだけが残された。交差点の信号は決められた通りに色を変え、車が行き交い、人が渡った。朝から特別なことは何も起きていないかのようで、でも実際、わたし以外の人にとっては何も起きてなんかいなかったのだ。

夜がきて、朝がきた。かと思うとまた夜になり、朝になった。わたしは歩き過ぎる人々や、車や、信号の明滅をただ見ていた。悲しみとか、悔しき、あるいは退屈、そういう感情はなぜか湧かなかつた。目の前のものをいつまでも眺めていられた。そんなふうにして幾日かが過ぎ、ふとわたしは、自分がこの交差点から全然動かずにいることに気がついた。どこかへ行きたいとか、誰かに会いたいという気持ちが少しもないのだ。もしかすると動かないのではなく、動けない、のかもしれない。

地縛霊、という言葉わたしは知っていて、自分の状態はつまりそういうものではないか

とも思った。でも地縛霊という単語からは普通、思いがけずその地に縛りつけられてしまった運命への恨みや絶望を連想しがちだけれど、わたしの中に、少なくとも主観的にはそういう意識はなくて、単にここから動く気がしないだけなのだった。それは一日の仕事を終えて帰宅したとき、いったん椅子に腰かけてテレビをつけたら、さほど面白くもない番組なのにいつまでも見続けてしまつてなかなか風呂にも入れない、ああいう状態に似ていた。生きていればどこかのタイミングでがんばって腰を上げるのだろうけれど、もうその必要がないのでずっとそのままになってしまふというか。

あるとき事故現場に、花が供えられた。近くに住む年配の女性が置いてくれたのだ。半分は切ったペットボトルに、数本の花が挿されていた。自宅の花壇から採つたのだろう、チューリップやキンセンカが入っていて、ちゃんとした仏花ではないのだけれど、べつに悪い気はしなかった。といって、格別嬉しいというわけでもない。わたしはほとんど無感動に、ただ事物とその移り変わりを眺めていた。もし霊感があつてわたしの姿が見える人がいたら、事故現場に立ち尽くす（ひよつとしたら血まみれの）女の虚ろな眼差しに、戦慄したことになる。まさかその幽霊が、興味の湧かないテレビをぼんやり見ている感覚だとは想像もせず。

それが、きみに出会う前のわたし。安定はしているけれど何のやり甲斐もない会社勤めをして（でもこんなふうに住めぬのなら安定ついていたい何だ）、誰からもちゃんと愛されたことのない（でも誰のこともちゃんと愛さなかったのだからお互いさま）、冬の陽の下にできるうつすらしい影みたいな人生。そんなものすら唐突に断ち切られ、本当の影になつてしまつたわたし。

きみを初めて見たのは、四月の終わりだった。ペットボトルの花たちはもうすっかり干からびて茶色くなつていた。

深夜、ちょうど日付が変わる頃、人通りの絶えた道をきみは駅の方から歩いてきた。そのとききみは十八歳で、大学の一年生で、この近くの学生マンションに入居したばかりだった。ふらふらと覚束ない足取りで交差点までやってきたきみは、おもむろな動作で赤信号を見上げて、立ち止まった。その日きみはサークルの新歓コンパで初めてお酒というものに触れた帰りだったのだ。何かを夢みるような奇妙な熱のある瞳と、やや薄いくちびるに浮かぶ微笑の影、まだまだ少年のようなきみの面差しを、わたしはすぐそばに立って、見ていた。夜中の信号は、昼間よりもずっと車優先になつていて、赤信号はなかなか変わらなかつた。タクシーや大型トラックなんか、間歌的にきみの目の前を通り過ぎて行つた。

きみは手持ち無沙汰にサークルの仲間や先輩たちとの会話を反芻しながら、目に映る物から物へと視線を移していく。やがて半分のペットボトルに挿された花の残骸、わたしの花に、目を留めた。

それは酒に酔つたきみのただの気まぐれには違いなかつた。きみが同年代のほかの人たちと比べて特別優しかったり慈悲深かつたりするわけではないこともわたしは知つている。だとしても、とにかくきみは、そのとき何の躊躇もてらもなく路傍の供花へ歩み寄り、目を閉じて両の手のひらを合わせたのだ。

事故現場に供えられた花に、むやみに手を合わせたり、同情したりしてはいけなさと、わたしもどこかで聞いたことがある。成仏できずにこの世をさまよう霊は想像を絶するような孤独感や悲しみにとらわれているから、生きている者の情がほんのわずかでも自分に差し向けられるのを感じると、砂鉄が磁石に吸いつくように引き寄せられ、その者に取り憑いてしまうのだと。

そういう話は半分まちがっていて、半分正しかった。わたしには何の希望もなかったけれど、だからといって打ちひしがれていたわけでなく、まして絶望には程遠かった。ただひたすら空虚な気持ちと、その中にあえて言えばひとしずくの自己憐憫のようなものがあるだけで、にもかかわらず、この男の子に、きみに、ついていきたいと思ったのだから。

きみはそのあと、未開封の段ボール箱だらけの慣れないワンルームに帰り、狙ったようなタイミングでかかってきた母親からの電話に出て、自分は大丈夫、一人暮らしは楽しい、友だちもできたし、困っていることもない、という話をした。水道水を蛇口から直接飲み、窓のカーテンを閉めてから着ているものを全部脱いで、ユニットバスに入り、便座に座っておしっこをしてシャワーを浴びた。壁面の鏡に映った自分の痩せた白い裸体を、きみは何かを確認しなくてはいけなみたいにさまざま角度から眺めていたが、やがて勃起し、自慰をした。わたしはもちろん、男性の自慰を見るのはこのときが初めてだったけれど、驚きもしなかったし、嫌悪感もなかった。死者とはそういうものだ。

それからのわたしはいつでも、きみの隣に、背後に、中空にいて、きみに寄り添い、生活をともにした。きみを見つめ、ときにはきみの目を通して事物や人々を見た。それがわたしの喜びだったとは言えない。死者には生きているときに感じるような喜びというものはない。ただわたしにとっては、きみのそばにいて、ただそれだけが、疑いもなく自然なことだったのだ。

きみは真面目な学生で、講義やゼミを欠席することはほとんどなく、一方でサークル活動にも熱心に参加した。きみが入っていたのは映画のサークルで、そこでは常に数本の映画を同時進行で制作していたから、きみもスタッフやキャストとして引く手あまたで、部屋に泊まりこむようなこともしばしばあった。それはせわしない毎日だったけれど、充実という感覚を、きみは初めて知った。

そんな中で当然、きみにも好きな人ができた。相手はサークルの先輩で、きみはその人の初監督作品の脇役兼撮影助手として参加していた。先輩はいつでも太った身体に首周りのヨレヨレになったTシャツを着て色の褪せきつたジーンズを穿き、ツルの折れた四角い眼鏡をセロテープで修復してかけているような、見た目には一切こだわらない青年で、どの角度から見ても美男子とは言い難かったけれど、映画への情熱にあふれていて、話が抜群に面白く、彼のいるところには自然と人が集まった。入部当初、部室の隅でぼつんとしていることの多かったきみに、積極的に声をかけてきてサークルの空気になじませてくれたのもこの先輩だった。

撮影を兼ねた夏合宿で海へ行った帰り、特急列車のデッキで、きみは先輩に告白した。先輩はそのときドアに寄りかかって立ち、通り過ぎていく田畑を眺めていた。さすがの先輩も

強行軍のスケジュールにやや疲れた様子で、いつになく寡黙だった。ほかの部員はみんな客車の方にいた。きみと先輩は二人きりだった。声をかけると、ん、と先輩は返事をしたが、きみの方を振り返ろうとはせず、そのまま外を見ていた。その瞬間、きみは今なら言えると思った。先輩がこっちを見ないうちに、言ってしまうと思った。

結果は惨憺たるものだった。先輩に悪気はなかったのだけれど、ごく少数のとくに親しい友人たちと飲んだ際にこの出来事を漏らしてしまい、その友人たちはまた少数の親しい友人たちに話してしまい、というわけで、きみの告白はあっという間にサークル中、さらにはサークルとは関係ないゼミ仲間なんにも知られてしまったのだった。

きみだってべつに、先輩がきみの恋心を受け入れ、つき合ってくれと思うって告白したわけではない。きみの中の倫理観のようなものが、結果はどうあれ、気持ちを正直に伝えるべきだと強硬に主張したのだ。つまりは、真面目だったのだろう。

先輩は、明らかにきみを避けるようになった。無視するわけではなく、必要があれば話すし、笑顔も見せるけれど、きみが一人でいても寄ってくることはなくなったし、秋から制作する映画には声もかけられなかった。やがてきみは、一部の部員から陰で「おかま」と呼ばれていることを知り、部室から足が遠のいた。

わたしは先輩に対して怒りを感じたりはしなかった。仕方ないことだと思っていた。けれどある日きみが眠れないまま朝を迎え、大学に行かなきゃと思いついても布団から起き上がることができず、講義の始まる時間になってついに声もなく涙を流し始めたとき、わたしは自分の中から暗い色をした光が、生きている人間の目には決して見えない光が、先輩に向けて放たれるのを感じた。その光とはつまり呪いとか祟りと呼ばれるものだ。といってもこのときの呪いはそれほど強烈なものではなかった。先輩は大学を卒業後、映画業界になんとかもぐりこみ、三十歳のときに低予算の映画で商業監督としてデビューするのだけれど、わたしの放った軽い呪いによって決して成功することはなかったし、妻には浮気をされて逃げられ、五十を過ぎてから実家に戻ってスーパーマーケットのパートタイマーになった。

きみは親に内緒で大学を休学し、部屋にこもった。昼も夜もカーテンを閉めきったワンルームで、ほとんどの時間を寝て過ごし、たまに起き出してはテレビを見たりゲームをしたり（本を読むことはできなかった）、真夜中にだけコンビニへ買い出しに行ったりした。そんな生活が半年以上も続いた。放っておけば何年も続きそうな気配だった。

わたしはきみに直接話しかけたり、姿を見せたりすることはできなかったけれど、きみの眠りの中、夢の中へなら、ときに入りこむことができた。その行為は当初わたしにとっても難しいことで、やろうと思つてできることではなかった。わたしときみの持つ波長みたいなものが、たまたまうまく合致したときにだけ、生じる現象だったに過ぎない。

あるときわたしはきみの夢の中にいた。きみは十二歳の少年で、舞台は海辺の町だった。いとこの運転する自転車の荷台にまたがり、夕暮れの町中を走っている。この町に住むいとこはひとつ上の中学一年生で、きみの初恋の相手だ。夏休みは終わろうとしている。きみはもうすぐこの町を去らなければならない。ここまでは夢でありながら、きみの記憶でもあ

る。やがて自転車は急な下り坂に差しかかる。ちゃんとかまってるよ、いとこが振り返りもせず言う。その少しかすれた、ぶっきらぼうな声。きみはいとこの腰に両腕を巻きつける。自転車は坂道を下り始める。急激に加速していく。きみは両腕に力を込めて、いとこの身体を抱きしめる。いとこは言う。痛えよ、離せよ、気持ち悪いな――。きみはショックのあまり手を離す。途端に荷台から落下する。しかしきみは地面に激突することなく、落下はいつまでも続く。いとこに成り代わったわたしは、自転車を捨て、きみのもとへ走る。落ちてきたきみの身体をわたしはしっかりと受けとめる。今度はわたしの方から抱きしめて、ごめん、とつぶやく。きみは目を覚ます。

翌日も、その翌日も、きみの生活は変わらないように見えた。けれど二週間後、きみは久しぶりに髪に櫛を入れ、髭を剃り、電車に乗って大学の事務局へ赴いて、復学の手続きをした。それから母親に電話をして、勝手に休学していたことを正直に話し、謝った。

同期生より一年遅れて大学を卒業したきみは、映像制作の会社に就職した。企業のPRビデオや、イベントの記録映像などを専門にしている会社だった。社会人としては少し鈍くさいところのあるきみだけれど、真面目な仕事ぶりで上司には可愛がられたし、物腰はやわらかく、顔も悪くない方なので、女性たちにも人気があった。

入社から三年が経ち、そろそろ大きな案件も任せてもらえるようになった頃、きみは取引先の社長から個人的な誘いを受けた。社長は三十八歳の独身女性で、かなり若い頃に結婚と離婚歴があつたけれど子供はいなかった。きみはこれもこれも仕事のうちと思つて、社長と何度か食事をもにした。食事だけで済めばいいなときみは甘く考えていたのだけれど、社長はもちろん次の展開を期待していたから、きみが一向に積極的にならないことに業を煮やし、とうとうある夜ホテルのバーで飲んでいるとき、今日は上に部屋をとつてる、とやや充血した目できみを見つめ、言った。

きみは断る言葉を思いつけず、押し切られるような形で部屋へ行った。ドアを閉めた途端、社長に両手で顔をはさまれてキスをされ、シャワーもなしにベッドへ連れて行かれた。きみは一応の努力をしてみたものの、やっぱりダメで、でも諦めきれずにやつきになつている社長をなんとかだめようとして、仕方なく、自分の恋愛対象が女性ではないことを、正直に、おだやかに、話した。

逆効果だった。社長は激昂し、きみを責め立てた。ありとあらゆる汚い言葉をきみに投げつけた。わたしは社長の語彙の豊富さに感心しつつ、こんなにも感情を高ぶらせることができる社長に、その生の充実、死者として、かすかな羨望を感じたりした。

一時間近く怒鳴り続けたあげく、社長はきみに土下座を要求し、きみはその通りにした。でもきみは決して今後の仕事のためにそうしたのではない。きみはただ申し訳ないという気持ちでいっぱいだったのだ。彼女を決定的に傷つけてしまったと感じていたのだ。

社長が実際、どこまで心に傷を負ったのか、わたしにとってはどうでもいいことだった。わたしからまた暗い光が放たれて、社長の下腹を射抜いた。社長はずっと子供が欲しくて、年齢的にあせっていたのだけれど、わたしの呪いから半年後、子宮内に腫瘍が見つかった。すぐに摘出して生命は助かったものの、子供をつくる望みは永遠に絶たれた。

社長のことだけが原因ではないけれど、きみはだんだんと仕事が嫌になり、辞めるべきか何度も考え、でもそのたびに思い直して、だましまし会社勤めを続けた。日々はゆるやかに、少しずつ、きみを締めつけていった。

三十二歳になって、きみはついに自分の欲望に折り合いをつけることにした。以前から知識としては知っていたあるイベントに、思い切って参加してみたのだ。場所は港湾地区にある一棟まるごとの貸倉庫だった。吸血鬼たちのレイヴパーティーめいた薄暗く病的な世界を想像していたきみだけれど、実際に行ってみたら思いのほか明るい照明の下、半裸の男たちがあっけらかんと飲んだり踊ったり笑い合ったりしていて、安心すると同時に拍子抜けした。

ある男が、きみに声をかけてきた。短髪を針のように立てた筋肉質の大男で、ショートパンツにサンダルを履いていた。むき出しの胸と上腕にほとんど隙間なく入ったタトゥーに、きみはまず目を奪われた。ねえ。こっちで飲もうよ。男はハイネケンの緑の瓶を両手に持ち、一本をきみに差し出して言った。

きみたちは隅のソファへ行って二人で飲み、お互いについて話した。男はすぐにきみの手を握ったり、ひざを撫でたりし始めたので、きみも男の厚い胸に刻まれたタトゥーを指でなぞった。そうやってしばらくの間、好意や欲求を確かめ合った後、きみは男について二階へ上がり、ずらりと並んだ小部屋のひとつに入っていた。簡易なスチールベッドがひとつだけあり、ほかには何もない部屋だった。にもかかわらず男はいつの間にかコンドームとローションを手にしていて、そんなものがどこから出てきたのかきみにはまるでわからなかった。きみたちはそこで性交をした。きみには初めての経験だったけれど、相手に初めてだと悟られないようにがんばった。楽しむ余裕はあまりなかった。ただ、男が獣の吼えるような声を上げてきみの中で果てたとき、きみは何かとても大切なことを成し遂げたような、奇妙な満足感を覚えたのだった。

きみは男と連絡先を交換し、ときどき会うようになった。気心が通じるようになるにつれ、性の快楽も大きくなっていった。そうして半年が過ぎ、自分たちはつき合っているのか、それともただの体だけのパートナーなのかと、きみが考え始めるようになった頃、男は突然、きみを殴った。

最初は性交の最中だった。だからきみは、これも刺激を増すためのひとつの技術なのだと思っただけで、次第に、性交の前にも後にも、きみは殴られるようになった。普通に会話をしている途中で、男はいきなり殴るのだ。そこにはきみに理解できるどんな理由もなかった。握りしめた拳できみの腹を殴り反吐を吐かせた。ときにはキャッチャーミットのような平手でビンタをすることもあった。きみにとっては、平手の方がずっと屈辱的で、つらかった。初めて会ったときからこうしたかった、殴りたくてたまらなかつたんだ、とあるとき男はきみを殴ったあとで言った。

何かと理由をつけてきみが男を避けるようになって、男はきみの部屋へ押しかけてくるようになった。もう来ないでほしい、会いたくない、と言うと、めちやくちやに殴られた。きみは引越すしかなかった。それでも男は諦めず、会社の前できみを待ち伏せていた。き

みの顔には生傷が絶えず、会社の人たちにも不審がられた。きみはどうとう、十年余り勤めた会社を辞めざるを得なかった。

そういう一切をわたしはきみの傍らで見ている、ことさらに心を痛めたとはいえないのだけれど、呪いというのは自律しているものらしく、また暗い光が放たれた。今回のそれは少し強烈だった。黒く太い稲光みたいなものが、男のもとへ走ったのだ。

きみは最後まで知らなかったけれど、じつは男には妻と子供がいた。男自身と妻には何の害も及ばなかった。子供には届いた。小学校に入ったばかりの男の子の身体の奥深くに、このとき重い病の種がまかれたのだ。その病のため男の子は三十歳を前に死ぬことになった。男の子は二十代前半で結婚し子供をつくっていたのだけれど、病は遺伝し、さらに遺伝し、七代あとまで続いたところで家系は途絶えた。

きみは同じような業種の別の会社に中途採用された。給料はずっと安くなり、昇給もほとんど期待できなかった。いつでも転職できるように機会をうかがっていたけれど、結果的には五十歳を過ぎるまでその会社に勤めることになった。それはきみにとつて不毛の荒野を歩き続けるような二十年間だった。仕事には何の熱意も希望もなかった。私生活では数多くの男に出会ったけれど、どの男とも二回か三回性交したら、それ以上は会わないようにした。

現実の生活でまともな人間関係を築けなくなったきみは、四十代の後半くらいから塞ぎこむことが増え、仕事も休みがちになっていった。そんなきみの夢の中へ、わたしはときどきお邪魔した。美しい男の姿できみの前へ現れ、理想的な恋人としてふるまった。目を覚ましたとききみは何も覚えていなかったけれど、きみが本格的に心を病まなかったのは、眠りの中にささやかな解放の時間を持っていたせいかもしれない。それがいいことなのか悪いことなのか、わたしにはわからない。死者は価値判断をしないから。

五十代になって、きみは大病を患った。入院し、会社を長く休むことになって、結局はそれが原因で退職を余儀なくされた。その後回復し、退院したきみは、求職活動を始めたものの思うような職には就けなかった。半年かかって、ようやく警備会社に非正規で雇ってもらうことができた。工事現場の交通誘導がきみの新しい仕事だった。現場の作業員には気の荒い者もいて、あまり動きの良くないきみはしばしば罵声を浴びせられた。気に入らない仕事だったけれど、生活のためには我慢するしかなかった。でもそんな中、予想もしない出会いがあったのだ。

ある日、現場に入ってきた二トントラックをいつものように誘導した。降りてきたドライバーは初めて見る顔だった。ありがとう、とその男は言った。きみよりも少し背の低い、やや固太りした色黒の男だった。歳は四十前後に見えた。その日の仕事で、きみは気がつくとも男の姿を目で追っていた。何度も目が合った。ふと振り向くと逆に男の方がきみを見ていることもあった。それから毎日、男は二トントラックでやって来た。きみたちは自然と言葉を交わすようになり、食事に行くようになり、恋人として交際を始め、すぐに一緒に住むようになった。

きみたちはお互いを想い合い、愛し合った。それは素晴らしい日々だった。きみは初めて、

満たされるということを知った。幸せすぎて、怖いと思った。この幸福にもいつか終わりが来る、そのことが怖かった。そしてきみの不安が引き寄せたかのように、幸福の終わりはあまりにも早く訪れたのだった。

恋人は、コンビニエンスストアの前で、見知らぬ少年に刺されて死んだ。人の自転車のサドルに勝手にまたがって騒いでいた少年たちを注意したせいだ。恋人は殴られ、蹴られ、一人の持っていたナイフが腹をえぐった。

事件のあと、きみは恋人の死んだ場所へ行ってみた。コンクリートの地面に赤黒い染みがまだ薄く残っていた。きみはそれを血だと思った。実際は血ではなく、恋人が店で買った安ワインのボトルが割れたあとだった。恋人が死んだ日は、きみの誕生日だったのだ。

呪いが発動した。刺した少年は母子家庭で育ったのだけれど、その母親は子育てに失敗したという自責の念に耐えきれず冷たい雨の降る夕暮れどき首を吊って死んだ。少年にとって母親はこの世界でただひとり意味のある存在だったから、彼はその後、七十七歳で肺炎にかかって死ぬまでの半世紀あまりを、ただただ後悔で泣き暮らすことになった。

きみの生活は荒れた。当然だろう。きみは絶え間なく続く心の痛みを酒によって抑えようとした。酒量は以前の何倍にも増えた。仕事は惰性で続けたものの、朝起きられないこともあり、失敗することも多くなった。

そんな風にしてきみは六十歳になった。もはや若い頃の面影はなく、人より十歳は老けて見えた。仕事では息子のような年齢の現場監督に毎日のように怒鳴られた。きみは赤い顔をして、相手とは決して目を合わさず、いつでもすぐに謝った。わたしは現場監督を呪った。給料日になって、事務所で封筒に入った薄給を受け取ったきみは、その足で飲み屋に行った。支払いの段になって、ポケットにたしかに入れたはずの給料袋がないことに気づき、体中をさぐってみたがどこからも出てこなかった。きみは店先で土下座をした。そのあまりの汚らしさとみじめさに、金はいらないからさっさと帰ってくれ、と店主は言った。じつは店に来る途中、鼻水を拭くためポケットからハンカチを出したときに給料袋を落としていて、後ろを歩いていた中学生がすぐに気づいて拾ったのだけれど、彼はそれを着用したのだった。わたしは店主と中学生を呪った。

ある日きみは道を歩いていて、頭に水風船をぶつけられた。びしょびしょになって水風船が飛んできた方を見上げると、マンションの二階のベランダで小さな子供がニコニコと笑っていた。わたしは子供を呪った。

アルコールは時間をかけてきみの身体を破壊していき、やがてきみは再び入院することになった。担当になった医師や看護師はよくできた職業人たちで、見るからにみじめなきみにも笑顔で優しく接してくれた。もちろんわたしは彼らを呪った。みんな家に帰ればきみのことを思い出しもせず、夢の中のほんのわずかな居場所すらきみに与えようとしなかったからだ。彼らはそろいもそろってその後の人生を不幸続きで過ごすことになり五年後あるいは二十五年後あるいは七十年後と時期の差はあれそれぞれにろくでもない死を死んだ。

わたしは連日連夜、きみの夢に入り浸り、彼らの正体をささやき続けたから、覚醒のたびごと、きみは医師や看護師への不信感を募らせていった。そしてついある夜、点滴の針を

引き抜いて、ヨロヨロと病院から逃げ出した。途中で何度も転倒したり、そのまま座りこんだりしながら、なんとか近くの公園までたどり着いた。這うように木の根元まで行って、幹に背中をあずけた。空には厚い雲が広がっていた。風はなく、蒸し風呂に閉じこめられたような、七月の夜だった。

きみは下着の上に病衣一枚の自分の姿を見て、今が冬だったら、と考えた。冬だったら、このまま凍えて死ぬことができるのに。きみは生まれて初めて、心の底から自分の死を願った。

そのときわたしは初めての祝福を、最初で最後の祝福をきみに与えたのだ。それはあまりに呪いに似ていて、ほとんど見分けがつかなかった。爆発するような轟音とともに黒雲から放たれた稲妻が、きみのもたれた樹木を打った。一瞬ののち、きみは焼け焦げた木と自分の身体を、そばに立って見下ろしていた――。

☆

気がつけばぼくは、まっふたつに裂けて煙を上げる樹木の残骸と、赤黒く焼けた自分の身体を見下ろしていた。何が起きたのかはすぐにわかった。振り返ると、そこに女が立っていた。

若い女性だった。顔を見るのは初めてだ。でもぼくは彼女のことをずっと昔から知っていた。その存在を感じ続けていた。

彼女はぼくに「きみ」と語りかけ、自分が死んでからのこと、ぼくと一緒に過ごした長い時間の物語を語った。それは何十年にもわたる話であり、ぼくの覚えていないことも多く含まれていたが、彼女はすべてを一瞬で語りきった。死者の時間は、生きている者の時間とはまったく違っている。それは過去から未来へ向かって流れるのではなく、一挙に目の前に、地図のように広がるのだ。

ありがとう、とぼくは言った。ほかに言うべきことがなかったからだ。だが彼女はもうそこにいなかった。かき消えた。役割を終えたのだろう。そんなものがあるとして。あるいは、ぼくがもう少しセンチメンタルな死者なら、成仏という言葉を使うかもしれない。彼女に自覚があったのか大いに疑問だが、ずっと寂しげに微笑んでいる女性だった。

人が集まってきて、救急車が来て、警察が来て、あるべきことがあったあとで、ぼくだけがその場に残された。朝が来て夜が来て、日々は際限なく過ぎていった。ぼくはいつまでも公園の片隅に立っていて、人々や、犬や猫、鳥や虫たちが、やって来ては去っていくのを、季節の移り変わりを、ただ眺め続けている。

そんなふうにしても、いつか、ぼくにも何か起きるのだ。彼女に何かが起こったように。ぼくはそのことを知っている。だけどべつにぼくは、時間の果てまでこうしていたってかまわない。宇宙の終わりまでこうしていたってかまわない。

(了)